



表紙 瀟湘夜雨図 横山大観筆
解説は29ページ参照

題字デザイン・桑山弥三郎

もくじ

計量的日本人論……………林 知己夫…… 4

漢字について……………黒羽亮…… 8

伊沢修二と岡倉天心……………安嶋 彌……10

地方分散文化……………真鍋 博……12

著作権ニュース

著作権者不明の場合の著作物利用に
関する裁定について……………13

著作権紛争解決あっせんの成立について……………13

文化庁ニュース

文化行政長期総合計画について②……………14

文化財の新指定……………18

移動芸術祭春季公演計画決まる……………24

こども向けテレビ用優秀映画
製作奨励金交付作品決まる……………25

第9回芸文懇開かる……………26

著作権法30条の改正について
要望書を文化庁長官に提出……………26

〔資料〕

翻訳者及び翻訳物の法的保護並びに翻訳者の
地位を改善する実際的手段に関する勧告(仮訳)……26

美術館・博物館・文化施設めぐり①

横山大観記念館……………30

国立劇場ニュース……………31

伊沢修二と岡倉天心



安嶋 彌
(文化庁長官)

音楽と美術が芸術の大きな分野であることはいうまでもないところであるが、この二つの分野について明治の前半に決定的な方向づけが行われ、それが今日に至るまで大きな影響を残していることは、改めて認識してよいことと思つた。

明治五年に「学制」が發布され、「必ず邑(むら)に不学の戸なく、家に不学の人なからしめんことを期す」という大号令が発せられたとき、「当分のラック」という経過規定が付されたといえぬ教科目として「唱歌」(Singing)が掲げられたことは注目すべきことである。そして、教員養成制度調査のためにアメリカに留学した伊沢修二は、かの地における唱歌教育に大きな関心を示し、帰国後(明治十

一年)文部大輔田中不二麻呂に対して「唱歌」のあり方について日賀田種太郎と連名で次のような上申書を提出した。すなわち、上申書は「我国ノ音楽ニ雅俗ノ別アリ。其ノ雅ト称スルモ調曲甚高クシテ大方ノ耳ニ遠ク又其ノ俗ト称スルモノハ調曲甚卑クシテ其害却ツテ多シ。畢竟此ノ如クニテハ之ヲ学課トシテ施スベカラズ」とし、西洋の音楽にも我が国に適應できるものがあるから「彼我和合シ一種ノ楽ヲ興」す必要があると述べ、そして日賀田はこの「一種ノ楽」を「国歌」(National Song)と名付けた。こうした経過があつて、明治十二年に文部省に音楽取調掛(後に東京音楽学校に発展する)が設けられ、そこを中心とする多くの小学唱歌が作られたが、これらは今日なお愛唱されている。

しかし、「ちようちよう」の曲がスペイン民謡であり、「むすんでひらいて」がジャン・ジャック・ルソーの作曲といわれ、「すずめのおやど」の曲がフランス民謡であることは余り知られていない。また、「螢の光」はスコットランド民謡 Auld Lang Syne の曲であり、「菊すなわち例の」庭の千草」は、アイルランド民謡 The Last Rose of Summer の曲であり、「故郷の空」は、スコットランド民謡 Coming Through the Rye の曲であった。さらに中等唱歌「道生の宿」の曲は、イギリス人ピシエップの Home, Sweet Home の曲であった。また、文部省唱歌ではないが、「真白き富士の嶺」ではじまる「七里浜の哀歌」はアメリカ人ガードン作曲の When we Arrive at Home の曲であった。

このように欧米の歌曲が「換骨奪胎」以上の変形を受けながら、なお新しい生命を得て、日本人の血肉となつて今日に至っていることは、見事というほかはない。また、こうした西洋音楽の摂取は、単純な欧米文化の心酔からではなく、伝統的な道徳思想を踏まえ、

国を憂える真情から行われたのであつて、歌詞についていえば、「ちようちよう」は「桜の花の栄ゆる御代に」遊んだわけであるし、「菊」は、「人の操もか

くこそ」と秋の霜にたえる白菊の孤高をたたえるものであつた。また「故郷の空」は異郷にあつて父母、兄弟の慈愛を思う心にあふれている。しかし、こうして始まった唱歌教育は、学校教育の場から日本の伝統音楽をすべて排除してしまつた。雅楽は宮廷や社寺に、俗曲俗謡は庶民や遊芸の世界にしか残らなかつた「学校唱歌、校門を出ず」という反面、雅俗の伝統音楽は、校門に入ることができなかつたのである。排仏毀釈や伝統音楽の否定を伴つた「文明開化」はまさに「文化大革命」であつたわけである。そして学校教育に、鑑賞教材としてではあるが、箏曲「六段」、「今様(中世歌曲)民謡「追分」、長唄「越後獅子」、雅楽「越天竺」が採用されたのは、ようやく昭和三十三年の学習指導要領改訂の際に至つてであつた。

今日、音楽会に行く、聴衆の大部分は若い人々であり、そして百年、五十年以上も前の西欧のシンフォニー、オペラ、歌曲などが愛好されている。私も、その愛好者の一人であるが、しかし、こうした西洋愛好が天下の大勢であり、しかもそれが一般に、当たり前のことと見られていることは奇妙なことのように思う。また、このような

見方は、いつまでも「文明開化」の域を抜けられない日本文化の特殊な在り方を物語るものともいえそうである。

○

伊沢修二(一八五一年―一九一七年)としばしば対置される人物に、岡倉天心(一八六二年―一九一三年)がある。天心は、伊沢よりは十歳ばかり若く、東京大学を卒業したあと文部省の音楽取調掛で伊沢の下で仕事をしたが、奔放不羈な天心の性情と伊沢の厳格主義は相容れなかつたといふ。

さて、伊沢を除いて明治の音楽教育が語れないように、天心を除いて明治の美術教育を語ることはできない。伊沢は、先にも述べたように日本の音楽を伝統的音楽の否定の上から立ち立てようとしたのに対して、天心は日本の伝統の上に新しい美術を發展させようとした。また、伊沢が雅俗いづれの楽も採らなかつたのに対して、天心は、文人画や浮世絵を排し、狩野派をもつて正統とした。

また、音楽取調掛の設置に遅れること六年目の明治十八年、文部省に図画取調掛が設けられたが、フェノロサのほか天心や狩野芳崖などが委員としてこれに参加している。この委員会の報告には、日本画が西洋画に毫も劣らな

いこと、西洋画の採用は日本固有の美術思想を破壊すること、線の微妙を尊んで、鉛筆より毛筆を用いるべきことが述べられているといふ。

ところで、東京芸術大学は、本年創立九十年を迎えるが(ちなみに天心らが発刊した「国華」は本年千号となつた)、その前身である東京美術学校は、明治二十年浜尾新を校長事務取扱として発足し、二十三年天心が二十九歳で校長となつた。同校は、はじめ日本画と彫刻と美術工芸の三科をもつて発足し、西洋画科が設けられたのは明治二十九年になつてであつた。

これに対して、同じく東京芸術大学の前身である東京音楽学校は、伊沢修二を初代校長として明治二十年洋楽科をもつて発足し、邦楽科が本科として認められたのは、漸く昭和十一年になつてからであつた。

結局、音楽の世界においては、美術の世界における天心のごとき人物は出なかつたのであつて、伊沢といふいわば開明派の巨人が永く斯界に影響を与えてきたのである。天心が望んだと伝えられるように、もし九代目市川團十郎が音楽学校の教授に起用されていたら、音楽界の状況はあるいは変わつていたかも知れない。

竹内好もいふように文明開花の大勢の中にあつては、こうした天心の「保守性はじつは戦闘的、革新的で」さえあつた。嗚呼西洋開花ハ私欲ノ開花ナリ。私欲ノ開花ハ道徳ノ心ヲ損シ、風雅の情ヲ破リ、人身ヲシテ一箇ノ射利器械ヲラシム、といふ天心の言葉は今日にも通用しそつである。現代の日本文化が「文明開化」の末裔であるとすれば、これまた当然のことかもしれない。

伊沢といえども新しい「国楽」の創造を目指していたことはすでに述べたとおりである。これからの日本の音楽は、果たしてどのような道をたどるのであるか。(五二・三・一〇)

〈参考文献〉

- 国立教育研究所「日本近代教育百年史」、吉川英史「日本音楽の歴史」、山住正巳「唱歌教育成立過程の研究」、團伊玖磨・小泉文夫「日本音楽の再発見」、井上武士編「日本唱歌全集」、竹内好「岡倉天心」、「日本の思想家(のうち)」、木下長宏「岡倉天心」、金子書房「美術教育講座(原理編)」

こうした経過をへて今日、美術の世界においては、絵画でも彫刻でも、和洋の間にある種の均衡が保たれているのに対して、音楽の世界では、ピアノ、ヴァイオリンと琴、三味線の普及状況にも見られるように、洋楽の方が優勢といふことになつた。

たとえば、昨年の天皇陛下御在位五十周年の記念式典の音楽がほとんど洋楽であつたことなどもその一例である。二十年の文化の伝統をもつ国の公式行事で、どうしてあのような曲目の選択が行われたか。こうした選択も結局は音楽に関する一般の認識の現れである。

音楽の世界においては、天心に相当する者はついに現れなかつた。しかし、

* * *

編集後記

○本号から、美術館・博物館・文化施設めぐりを連載していくことにした。インタビュアーの清原れい子さんに、当分お願いする。

○巻頭には、林知己夫氏の「計量的日本人論」をいただいた。統計数理研究所では、昭和二十八年以来五年おきに同じ設問による調査を行っているが、日本人の集団の顔を探ることにより、日本人をつかまえようとする試みは面白い。規則をまげてまで無理な仕事をさせることもないが仕事以外のことで人のめんどうをみることもないクールな課長よりも、時には規則をまげて無理仕事をさせる、しかし仕事外でもめんどうを見る人情課長の方を日本人はこころ貫して二十年間、八割方が支持を与えているのは興味深い。(大)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課
TEL(0)三六八二二四(代表)

「文化庁月報」 六月号

(通巻第一〇五号)
昭和52年6月25日印刷・発行

編集文化庁

〒100 東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
発行所 株式会社 きょうせい

本社 千葉県東京都中央区銀座7丁目4番12号

営業所 千葉県東京都新宿区西五軒町52番地

電話 (0)三六八二二四(代表)

振替口座 東京 九一六一番

印刷所 (株)行政学会印刷所

定価・一五〇円(送料二九円)
年間購読料 一、八〇〇円